

WH Kirkaldy-Willis 著, 辻 陽雄 監訳

富山医科薬科大学医学部整形外科学教室 訳

腰痛のマネジメント

(AB 判 352 頁 14,420 円 (税込) 1990 医学書院 刊)

蓮江 光男

(日本赤十字社医療センター整形外科)

腰痛を主症状とする変性性腰椎疾患は、整形外科を中心とする日常臨床の common disease の一つであるが、残念ながら、その診療が常に科学的根拠に基づいた合理的かつ効果的なものであるとは断言できない。その理由は、腰痛の発症機序には依然不明確な面が多く、その臨床的評価や効果的な治療手段についても多くの問題点が残されているからである。国の内外を問わず、腰痛に関する学会や研究会がしばしば開催され、またこの方面の出版物が次々に出版される現状は、この間の事情をよく物語っている。

その点、このほど辻陽雄教授監訳により出版された WH Kirkaldy-Willis 編著の「腰痛のマネジメント」第2版は、一読して他書と異なる特徴を有することがよくわかる。

第1は、腰痛患者に対しての包括的治療の重要性を強調していることである。個人の4つの側面(身体、知性、情緒、精神)に注目し、

その環境との関係(趣味や興味、職場、社会活動、家庭や家族)に留意すべきであると述べているのは、とかく局所病変に目を奪われがちな我々に反省を促すものである。

第2は、病因がほぼ明らかである疾患よりも、慢性腰痛患者についての記載に重点をおいていることである。圧倒的に患者数が多く対応がむしろ難しいだけに、妥当な選択といえよう。

第3の特徴は、腰椎部の退行変性を3つの位相(初期機能不全、不安定期、安定期)に分類して、発症機序や治療法の選択と関連づけている点である。1人の患者をこの分類に従って診療することは必ずしも可能ではなく、また適切でない場合もあるが、腰痛の原因病態を理解する上で傾聴に値する考え方である。

第4は、治療法の中で保存療法の記載に重点が置かれている点である。腰痛患者の大半は手術以外の方法で治療されるだけに、我々

整形外科医ももっとこの方面に関心を持つべきであり、創意工夫がさらに要請される領域である。

最後に最も印象に残る点は、優秀なリーダーを中心とするチーム医療の重要性を強調していることである。編著者をはじめとする多彩な著者たちが、彼らの実地臨床に基づいた考え方を述べていることが、多方面からの統一のとれたアプローチが如何に大切かを自ら実証しており、この方面での充実が要求されている我々にとって極めて示唆に富む内容である。

編著者の WH Kirkaldy-Willis は1974年に設立された国際腰痛学会の founding member の1人であり、高名な腰痛研究者である。一方、翻訳に当たられた富山医科薬科大学整形外科学教室は、辻教授を中心に多年腰痛研究に取り組んでこられただけに、文章は格調高く、流麗であるとともにわかりやすく、学識に基づいた行き届いた配慮が実感される。

このような編著者および監訳者によって上梓された本書は、前述した内容からもわかるように、整形外科医のみではなく、腰痛患者の診療に当たる他科の医師やメディカルの方たちの座右の書として好適であり、自信を持って推薦する次第である。